

基調講演

アクティブラーニングの観点から

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター／教育学研究科)

<http://smizok.net/>

E-mail mizokami.shinichi.4u@kyoto-u.ac.jp

Contents

- ① アクティブラーニングに見る二つの構図
- ② 能動性を後押しする社会の力
- ③ 情報・知識リテラシーの育成から反転授業を見る

Contents

- ① アクティブラーニングに見る二つの構図
- ② 能動性を後押しする社会の力
- ③ 情報・知識リテラシーの育成から反転授業を見る

アクティブラーニングとは

旧定義:

- ・一方向的な知識伝達型授業における学習者の**受動的学習**に対する**能動的学習**の総称。
- ・知識習得を目指す伝統的な教授学習観の転換を目指す文脈で用いられ、その授業においては「アクティブラーニング型授業」等として使用されるべきである。



最近の定義:

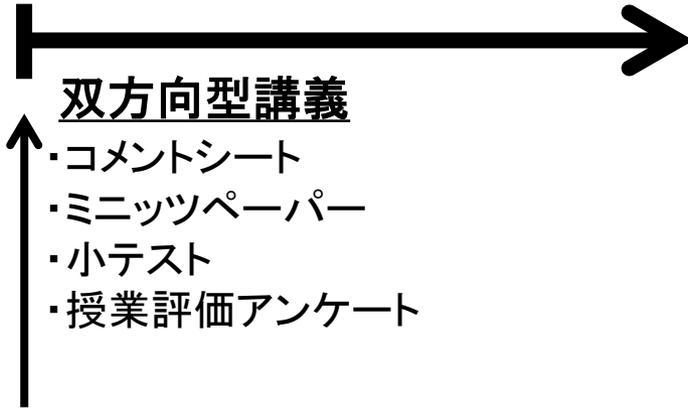
- ・一方向的な知識伝達型講義を聴くという**(受動的)学習**を乗り越える意味での、あらゆる**能動的な学習**のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。
- ・知識習得を目指す伝統的な教授学習観の転換を目指す文脈で用いられ、その授業においては「アクティブラーニング型授業」等として使用されるべきである。

アクティブラーニングの二つの構図と移行

(A)

教員から学生への一方向的
な知識伝達型講義

受動的



双方向型講義

- ・コメントシート
- ・ミニッツペーパー
- ・小テスト
- ・授業評価アンケート

能動的

1980年代の米国

1990年代の日本

- ・高等教育の大衆化
- ・学生の多様化

ポジショニング

(B) 教員から学生への一方向的な知識伝達型講義

1990年代の米国
2000年代後半の日本

受動的



能動的

双方向型講義

- ・コメントシート
- ・ミニッツペーパー
- ・小テスト
- ・授業評価アンケート



アクティブラーニング(型授業)

- ・ディスカッション / プレゼンテーション
- ・調べ学習 / 体験学習
- ・フィールドワーク
- ・協同学習
- ・協調学習
- ・LTD (Learning Through Discussion)
- ・PBL (Problem-Based Learning)
- ・PBL (Project-Based Learning)
- ・TBL (チーム基盤型学習)
- ・ピアインストラクション

ポジショニング

学生の学びと成長

Student Learning and Development

▪ Bonwell & Eison (1991) の定義:

...活動およびその活動についての思考に学生を巻き込むこと

- 学生は聴く以上のことをおこなう
- 情報の伝達よりも学生の技能の発展のほうに力点が置かれる
- 学生は高次の思考(分析や統合・評価等)を働かせる
- 学生は活動(読む・議論する・書く等)に従事する
- 学生自身の態度や価値の探求がより強調される

☞ 思考とは・・・論理的 / 批判的 / 創造的思考、推論、判断、意思決定、問題解決等と考えられるもの(楠見編, 2010)

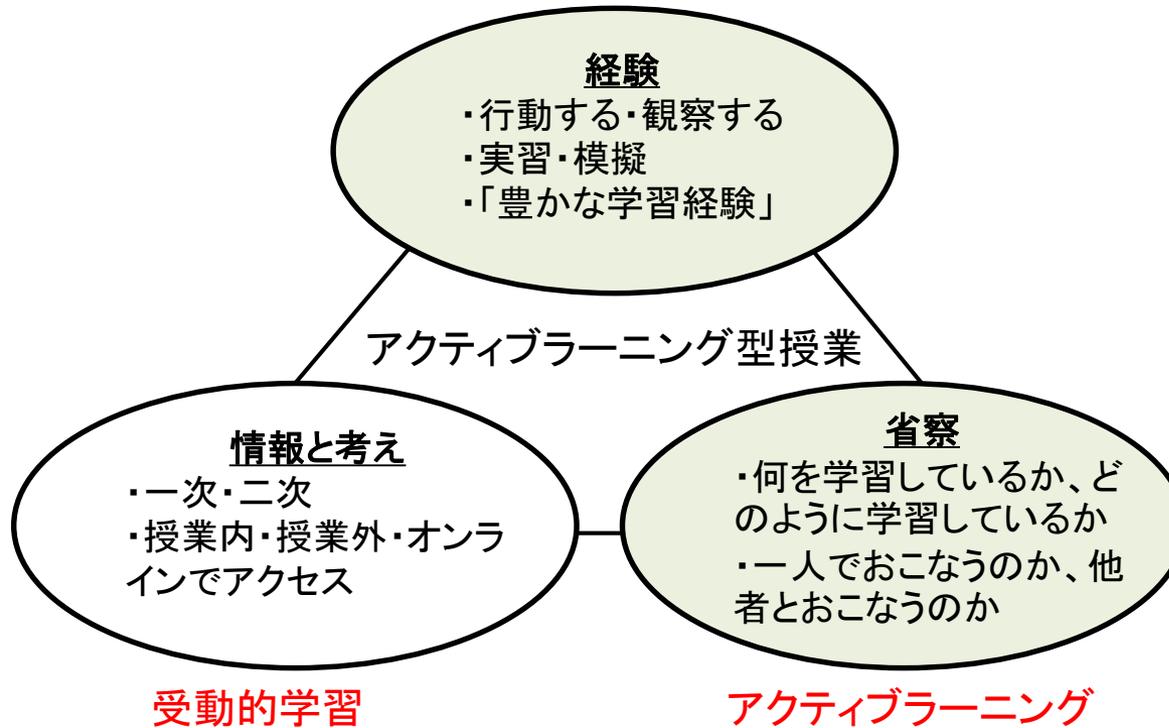
☞ 認知とは・・・知覚・言語・記憶・思考

(定義) 一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる**認知プロセス**の外化を伴う。

▪ Fink (2003, 2010) の定義:

「意義ある学習経験」
Significant Learning Experience

アクティブラーニング



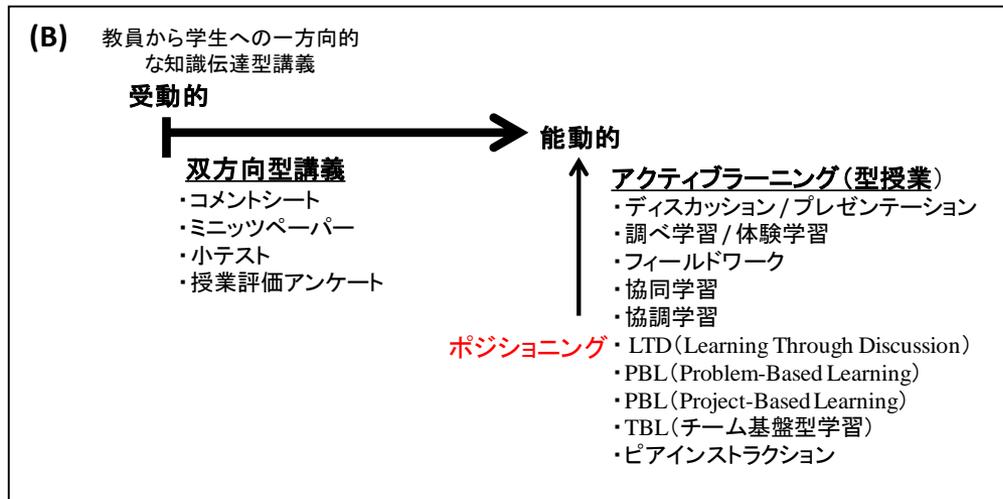
意義ある学習経験の要素:

- ・基礎的知識(鍵となる概念、用語、関係などについての理解と記憶)
- ・応用(学習内容を利用・適用する方法について知る)
- ・統合(主題を他の主題と関連づけることができる)
- ・人間の次元(主題を学習することで、個人的・社会的示唆を得る)
- ・関心を向ける(主題に関して関心を持つ。そして、さらに学ぼうとする)
- ・学び方を学ぶ(授業が終わった後も、主題について学び続ける方法を知る)

Contents

- ① アクティブラーニングに見る二つの構図
- ② 能動性を後押しする社会の力
- ③ 情報・知識リテラシーの育成から反転授業を見る

(B)の構図を後押しする社会の力



社会から学校教育に突きつけられる技能・
態度(能力)の育成課題

> 学校から仕事へのトランジション

School-to-work Transition

1970年代以降

- ・新しい技術の導入
- ・単純労働の減少
- ・女性労働者の増加
- ・契約やパートタイムをはじめとする不安定な、あるいは一時的な雇用を含む雇用形態の多様化
- ・社会の情報化・グローバル化の進展に伴う経済的な変動
- ・労働市場の規制緩和

☞ 溝上(2014a)

などがあり、若者の労働市場への参入をより厳しいものとしている。

トランジションの近年の発展

- ①大学(高等教育)修了者・年齢まで対象を拡張
- ②キャリア教育としての展開
- ③技能・態度(能力)の観点から学校教育のリデザイン
- ④初職から初期キャリアへの拡張
- ⑤後期近代の視点からトランジション構造を明らかにする
- ⑥障害者への拡張

文部科学省 学士力(汎用的技能) (2008)

- ・知識・理解
- ・汎用的技能
- ・態度・志向性
- ・統合的な学習経験と創造的思考力

OECD-PISA (2001) 「リテラシー」 OECD-DeSeCo (2003) 「コンピテンス」 経済産業省 (2006) 「社会人基礎力」

検索型の知識基盤社会(吉見, 2011)

- ICT(情報コミュニケーション技術)の発展
- Google、Yahooをはじめとする検索機能の充実
- 情報化が進み、知識の社会的機能が完全に変貌した



大学や大学教育に影響はあるか？

吉見に言わせれば:

影響があるかないかといった生ぬるい状況ではない。

大学それ自体の存続や、研究・教育の機能・社会的役割を深刻に問い直すものである。

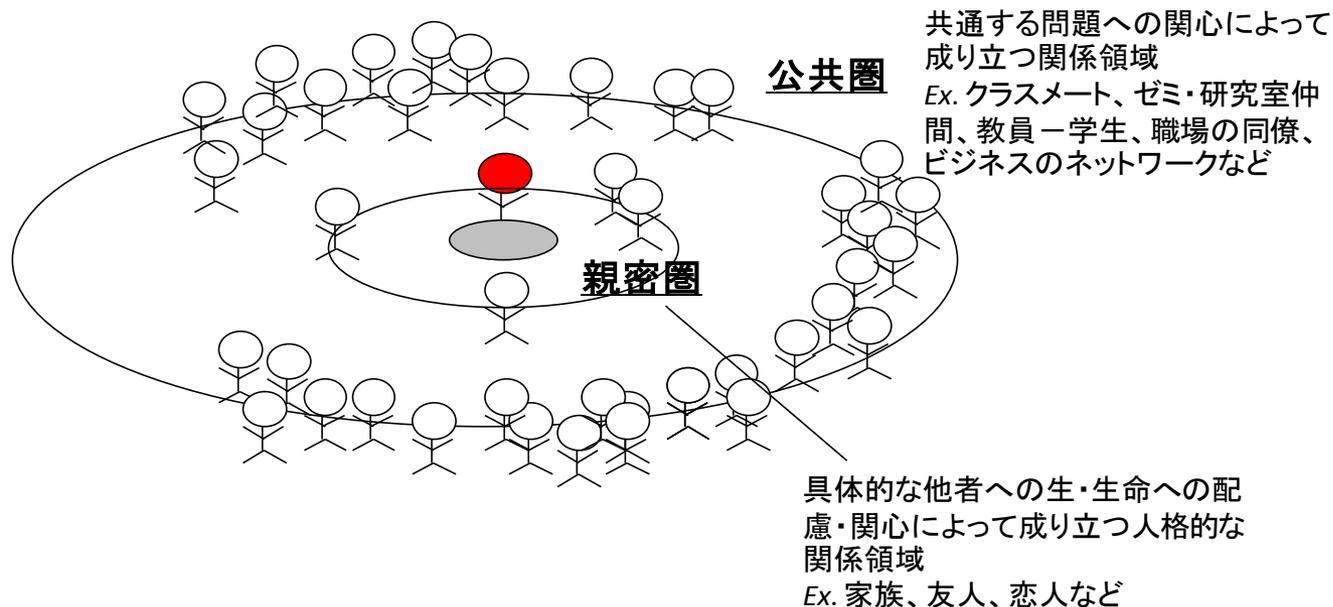
問題点

・「技能・態度(能力)の育成」では、アクティブラーニングによって育てる能力を適切に表現していないという問題点がある。

1. 知識・理解	専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。 (1)多文化・異文化に関する知識の理解 (2)人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技能	知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能 (1)コミュニケーション・スキル (日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる) (2)数量的スキル (自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる) (3)情報リテラシー (情報通信技術 (ICT) を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる) (4)論理的思考力 (情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる) (5)問題解決力 (問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる)
3. 態度・志向性	(1)自己管理能力 (自らを律して行動できる) (2)チームワーク、リーダーシップ (他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる) (3)倫理観 (自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる) (4)市民としての社会的責任 (社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる) (5)生涯学習力 (卒業後も自律・自立して学習できる)
4. 統合的な学習経験と創造的思考力	これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

社会から求められているのは、

- ・課題(知識)を共有してはじめて関係性が成り立つ公共圏においてのコミュニケーション
- ・とくにアクティブラーニングでは、知識操作に関わる対人関係・コミュニケーション



＝情報・知識リテラシー

Contents

- ① アクティブラーニングに見る二つの構図
- ② 能動性を後押しする社会の力
- ③ 情報・知識リテラシーの育成から反転授業を見る

反転授業 (Flipped Classroom) の位置づけ

教師から学生への一方向的
な知識伝達型講義
受動的

能動的

アクティブラーニング(型授業)

- ・ディスカッション / プレゼンテーション
- ・調べ学習 / 体験学習
- ・フィールドワーク
- ・協同学習
- ・協調学習
- ・LTD (Learning Through Discussion)
- ・PBL (Problem-Based Learning)
- ・PBL (Project-Based Learning)
- ・TBL (チーム基盤型学習)
- ・ピアインストラクション

授業学習(主)のための授業外学習(副)

ポジショニング

授業外学習(主) + 授業学習(主)

- ・反転授業

MORE ACTIVE

島根大学の反転授業

東京大学大学院情報学環 反転学習社会連携講座
FLITプロジェクト「大学の授業における反転学習の効果検証」

<http://flit.iii.u-tokyo.ac.jp/>

実施科目

- ・生物統計学(専門・選択必修科目/2・3・4年対象)
- ・ヒューマン・コンピュータ・インタラクション(専門・選択必修科目/2・3・4年対象)
- ・基礎化学IIA(専門・選択必修科目/2・3・4年対象)
- ・基礎水理学(専門・選択必修科目/2・3・4年対象)
- ・大学で学ぶ世界史B(教養科目/1・2年対象)
- ・大学で学ぶ教養古典(教養科目/1・2年対象)

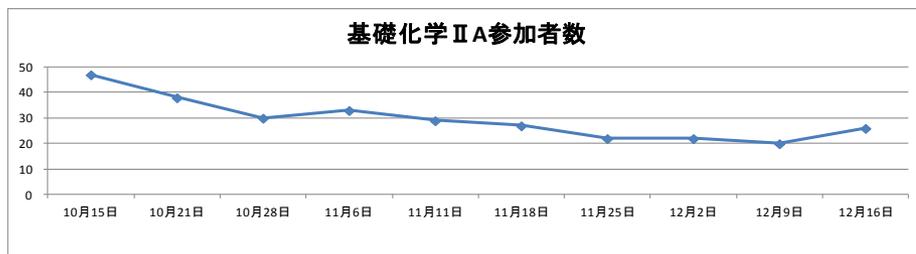
森朋子氏・本田周二氏(島根大学)との共同研究



「基礎水理学」の授業風景

授業からわかったこと

1. 専門の選択必修であっても
学生が逃げている。



2. 対面で教員が個別にノート
チェックを行う, その行為がオ
フィスアワー化していて効果が
高いと思われる。

3. 学習時間が増加している



反転授業の特徴・難しさ

特徴

- ・徹底的なアクティブラーニング(型授業)
- ・短い授業時間のなかで、知識習得以上の学習を有効におこなうことができる
- ・授業外学習の充実

難しさ

- ・適したオンライン教材(MOOCなど)を見つける、作成するのが容易ではない
- ・モチベーション・ディバイド: 予習の質が授業をかなり左右する
(Berrett, 2012; Herreid & Schiller, 2013)
- ・教員は授業者の予習状況を毎回かなりアセスメントしておかないと、授業内での学習が有効なものとならない(Talbert, 2012)
- ・多くの学生はオンライン教材を長時間見ることが面倒だと感じる(Amresh, Carberry & Femiiani, 2013)

情報・知識リテラシーの観点から見て

反転授業がどこまで徹底的なアクティブラーニングを実現しているかが、授業の善し悪しを見る一つのポイントになる

1. 情報の知識化

情報を受け手の知識世界に位置づけ、行動に影響を及ぼす、意味ある知識とする

2. 知識の活用

知識を身のまわりで起こっている社会や自然を理解するために、あるいは問題解決場面で活用する

3. 知識の共有化・社会化

他者に知識を伝えたり、他者の持つ知識とすり合わせて統合したりすること

4. 知識の組織化・マネジメント

知識世界を整理・関連づけ・グルーピングすること



ご清聴有り難うございました

Contents

- ① アクティブラーニングに見る二つの構図
- ② 能動性を後押しする社会の力
- ③ 情報・知識リテラシーの育成から反転授業を見る

興味があればお読みください

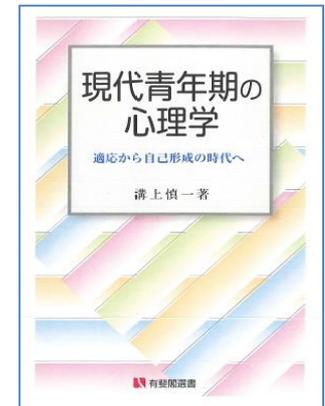
溝上慎一 (2006). 大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ！— 有斐閣アルマ

【関連】学習やキャリア意識をいかに日常課題とさせるかを論じた本。初年次教育テキスト。



溝上慎一 (2010). 現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ— 有斐閣選書

【関連】青年期の現代への変貌を歴史的・社会的に概説しつつ、学習やキャリア意識(2つのライフ)が、大学生にとっていかに現代的な青年期課題になっているかを説明したもの。



文献

- ◆ Amresh, A., Carberry, A. R., & Femiani, J. (2013). Evaluating the effectiveness of flipped classrooms for teaching CS1. *Frontiers in Education Conference, 2013 IEEE*.
<http://ieeexplore.ieee.org/stamp/stamp.jsp?tp=&arnumber=6684923&isnumber=6684765>
- ◆ Berrett, D. (2012). How 'flipping' the classroom can improve the traditional lecture. *The Chronicle of Higher Education: Teaching*, February 19, 2012.
<http://chronicle.com/article/How-Flipping-the-Classroom/130857/>
- ◆ Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). *Active learning: Creating excitement in the classroom*. ASHE-ERIC Higher Education Report No.1.
- ◆ エントウイスル, N. 山口栄一訳 (2010). *学生の理解を重視する大学授業* 玉川大学出版部
- ◆ フィンク, L. D. 土持ゲーリー法一 (監訳) (2011). *学習経験をつくる大学授業法* 玉川大学出版部
- ◆ Fink, L. D. (2010). Designing our courses for greater student engagement and better student learning. *Perspectives on Issues in Higher Education*, 13 (1), 3-12.
- ◆ 溝上慎一 (2013). 何をもってディープラーニングとなるのか?—アクティブラーニングと評価— 河合塾 (編) 「深い学び」につながるアクティブラーニング—全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題— 東信堂 pp.277-298.

文献

- ◆溝上慎一 (2014a). 学校から仕事へのトランジションとは 溝上慎一・松下佳代 (編) 高校・大学から仕事へのトランジションー変容する能力・アイデンティティと教育ー ナカニシヤ出版 (2014年3月刊行予定)
- ◆溝上慎一 (2014b). 自己ー他者の構図から見た越境の説明ー社会的な他者性を統合して発展するー 富田英司・田島充士 (編) 大学教育ー越境の説明力を築くー ナカニシヤ出版 (2014年3月刊行予定)
- ◆梅本勝博 (2006). ナレッジ・マネジメントの起源と本質 エコノミスト, 84 (41), 50-53.
- ◆吉見俊哉 (2011). 大学とは何か 岩波新書
- ◆Talbert, R. (2012). Inverted classroom. *Colleagues*, 9 (1), 18-19.

講師プロフィール

1970年1月生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手・講師を経て、2003年より京都大学高等教育研究開発推進センター准教授(大学院教育学研究科兼任)。京都大学博士(教育学)。



<http://smizok.net/>

日本青年心理学会常任理事、日本発達心理学会理事、大学教育学会常任理事、『青年心理学研究』編集委員、『大学教育学会誌』編集委員、“*Journal of Adolescence*” Editorial Board委員、“*International Conference on the Dialogical Self*” Scientific Committee委員。公益財団法人電通育英会大学生調査アドバイザー、大阪府立大学高等教育開発センターIR顧問ほか、高校のSSH運営指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と高等教育(大学生の学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事へのトランジションなど)。著書に『自己形成の心理学－他者の森を駆け抜けて自己になる』(2008世界思想社、単著)、『現代青年期の心理学－適応から自己形成の時代へー』(2010有斐閣選書、単著)、『自己の心理学を学ぶ人のために』(2011世界思想社、共編)、『大学生の学び・入門－大学での勉強は役に立つ！－』(2006有斐閣アルマ、単著)、『生成する大学教育学』(2011ナカニシヤ出版、共著)など多数。